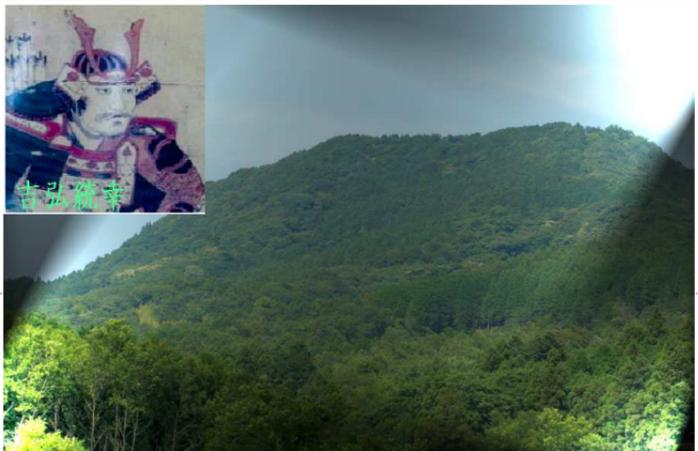


# 屋主 吉弘嘉兵衛尉 悠々!



それは十六世紀、戦国時代の頃です。となると、NHKの大河ドラマ『軍師 官兵衛』の世界です。そこで

は、播磨の小領主黒田官兵衛が苦悩しつつも夫人や家臣達と厳しい戦国の世を懸命に生きています。それは現代の社会にも通じるところが、多くの視聴者に共感と感動をもたらしています。

いずれ、舞台は九州に移り、官兵衛は豊前中津城の城主となります。そして登場するのが、もう一人の主役、屋山の殿さま吉弘統幸公です。屋山城主、吉弘嘉

兵衛尉統幸(かひようえのじょうむねゆき)は豊臣秀吉から「無双の槍使い」と賞讃され、朱柄の槍を許されるほどの豪毅な大将でした。黒田官兵衛やその家臣 井上九郎衛門とは、ともに朝鮮の役で戦った戦友であり、旧知の仲です。その黒田軍に對し、大友軍の総大将吉弘統幸は別府の石垣原で決戦を挑み戦死する



「都甲郷土史」という古い冊子があります。そこには『都甲谷の伝説』とでも言うべき歴史が記されています。その一節「金宗院」については「金宗院は養老年間の開基にして、代々吉弘氏の御菩提所なり。吉弘嘉兵衛が石垣原の合戦で戦死すると黒田方は、さらし首にしていた。そのことを聞いた金宗院の住職は夜間、ひそかにその首を持ち帰り、途中の都甲川で洗っている」と、『御僧ヨシナイ!』と首が言った。それで、この川をヨシナ川と言う。統幸戦死の日より十日後のことであつた。ただし真実かどうかは、わからない。」と記されています。

## 千年の歴史 都甲谷の伝説を考える

しい討死を遂げました。その忠義の生き方には、敵味方の別なく感銘を受けたようです。また、この戦いでは「武勇の間こえ有り都甲兵部等皆々討ち死」と記録されており、郷土の将士多数が命を散らしたことがわかります。



統幸の人物像については、黒田如水石垣原軍記では「吉弘嘉兵衛、日頃より情が厚く、武の道に達しており、大将の器たる人物である。よって、合戦の場においても家臣が皆、その場を立ち去ることがなく共に死ぬことを求めて、一所にて皆討ち死にした。」とあります。

その後、統幸の首級は吉弘神社に祀られ、墓はその裏にあります。このように吉弘氏は大友家のために最後まで、身命をかけ忠節を尽くした、まさに武士の鑑として誉高い家柄でありました。

すなわち、「宝暦元年(一七五一年)に都甲村において神社の氏子たちが争闘を起こし、千人余りの死者を出した。そこで千人塚を築いて薩摩の産である大島九兵衛が剃髪して僧となり、



戦国大名大友氏の一族であり武蔵・国東・太田・河内の一帯を支配した重臣の田原氏一族と主君大友氏との確執(かくしつ)から始まった攻防戦です。両者併せて、数千の大軍が河内平野から来縄一帯にかけて激戦を繰り返しました。ついに田原氏は攻め滅ぼされて、大友氏に乗っ取られま

す。この戦いで大友軍の主力部隊として戦ったのが、都甲谷の奥にそびえる屋山城の城主 吉弘統幸(むねゆき)とその家臣団でした。

のです。その戦いぶりや見事な生き様は、諸人に深い感銘を与え『武将の鑑』として讃えられました。

## 屋山城はいつ築かれた?

戦国時代、屋山には山城が築かれていました。その城主は吉弘氏です。豊後の戦国大名 大友氏時代に重用され、九州各地で奮戦した勇猛果敢な一族です。その時代は、今からおおよそ五百年前、一五〇〇年代の始めから一五九三年の大友氏の改易により、廃城となるまでの約百年間に及びます。それは、全国各地で戦いが続発した戦国時代の後半から、豊臣秀吉によって『天

## 中世の山城とは?



私たちが城郭を思い浮かべると、やはり姫路城になりますね。でも、姫路城は江戸時代初期に築城されたものです。立派な天守閣と石垣、瓦葺きの屋根をもつた近世の城です。壮大なスケールを誇る権力の象徴です。一方、戦国時代に作られた山城は土塁や空堀などの土の城で、板葺きの屋根を持つ高檜・物見台などで構成された、戦闘のための城です。だから、一般に山の頂上などの高所に築かれており、様々な工夫が凝らされてきました。※「日本の城」より



榮法寺を興して真宗の寺院とした。」とあります。

しかし、この宝暦元年は江戸時代の後期です。その時代に「千人余りの死者を出した」という事件は考えにくいのです。また、そのような大事件が都甲で起きたという他の記録もありません。となると別の大きな事件あるいは戦争が近くであつた、そして都甲の人々が数多く犠牲になつた戦いが考えられます。「千人余り」とは、非常に多い数を示す表現ですから、戦死した者の屍(しかばね)が累々としていたということでしょう。

吉弘氏の家臣団は、都甲氏や大友氏、六郷満山の山伏達を中心とした強者(つわもの)ぞろいでした。勇猛果敢なその戦いぶりは、宗麟の息子 大友義統(よしむね)から厚い信頼を受けていました。しかし、その分犠牲も多かった筈です。亡骸(なきがら)の多くは、都甲に連れて帰り、現在の寺川橋の下で洗われて、大力側の平地に埋められたと思われま。当時は、「沈み橋」でしたから、遺骸は石の上に寝かされ、遺族は泣きながら綺麗にして別れを告げのでした。墓所は、「千人塚」と呼ばれ、供養のために御堂が建立されたのです。



たしかに昔から、榮法寺本堂の床下には、多くの戦死者が埋葬されていると聞かされています。現在、山門の脇に立つ有縁堂(納骨堂)がある場所には、かつて地蔵堂があり、深夜、近くの道を歩くと血に濡れた馬の首が下がるかと言われて、おおいに恐れられていました。その地蔵堂には、おそらく「持地地蔵」が祀られており、無念の死を迎えて修羅道に迷う人々を、極楽浄土へと導いたのでありましよう。



- 屋山城虎口付近**
- A 坂虎口
  - B 柵形
  - C 櫓台
  - D 郭
  - E 腰郭
  - F 犬走り
  - H 花卉状堅堀
  - I 武者溜

屋山城は尾根に沿って横に長い連郭式の山城です。登るには、長安寺さんの裏から林道に入り、約二十分で頂上へ。眺望は東側のみです。

### 屋山城の構造図(入り口付近)

地方の雄・大内氏や毛利氏への備えとなる城でした。その規模は豊後の国でも一・二を争う大規模な山城で、急峻な屋山の地形を生かした難攻の城でした。ちなみに、吉弘一族の高橋紹運が築城した太宰府の「岩屋城」や立花宗茂の筑前「立花城」も、縄張りの厳しい堅城であり屋山城と共通する築城法を見ることが出来ます。

### 吉弘氏と都甲荘

一方、吉弘氏は十二世紀末に鎌倉幕府が開かれて、豊後の守護として入部した大友氏、その系譜を引く田原氏一族、その流れをくむ吉弘正堅(まさかた)が、国東の武蔵川上流に吉広城を築き、吉弘氏の祖となったものです。

その頃、都甲谷には、弘田付近を本拠地としていた都甲氏が開発した荘園があり、その範囲は現在の弘田、荒尾、築地、松行、新城の地域と考えられています。鎌倉時代の都甲荘は、都甲氏が地頭として支配する地域でした。その都甲氏は南北朝の争乱期(十四世紀)には、守護大友氏や田原氏の下で各地を転戦し、一所懸命に戦っていたようです。

室町時代になると大友氏一族に内紛が続きますが、それに関連した一四二九年の姫岳合戦で功績を挙げた吉弘氏は、恩賞として都甲荘の一部を与えられています。そして、



**吉弘氏は惣山屋山の六郷山執行**  
— 宗教的権威と軍事指揮権 —

都甲谷の中心にそびえる屋山の中腹にある屋山寺(現長安寺)は、鎌倉時代の頃より六郷山の惣山と

吉弘氏は一四三七年に武蔵から都甲荘へと本拠地を移します。五代吉弘綱重(つなしげ)の頃には、都甲荘の松行や六郷山領の長岩屋、加礼川一帯の支配権を獲得していました。その後、吉弘氏は屋山城を築城して戦時の詰城(つめじろ)とし、平時は松行付近に構えた館・寛城(かけいじょう)を居城としていました。寛城の位置は諸説あつて不明ですが、地元では都甲中学校の付近ではと考えられています。

### 六郷満山と吉弘氏

されていきます。六郷山とは、国東半島に点在する〇〇寺、〇〇岩屋などの天台系の寺院集団の総称(六郷満山)であり、惣山とはその中核寺院という意味です。吉弘氏は、この屋山寺の六郷執行(ろくごうしぎょう)に、一族のものを就任させて六郷山執行の権限を握り、これによって六郷山の宗教的権威や衆徒(僧兵)の武力、六郷山領等を掌握して、六郷山全体を支配しました。一方、地元の武士に対しては、武士の統率者として軍事指揮権をもち、都甲荘を中心に勢力を拡大して、政治的・経済的支配を確立するとともに、国東半島に確固たる地位を築いていったのです。

### 大内軍の侵攻と氏直の戦死

七代吉弘親信(ちかのぶ)・八代氏直(うじなお)父子の時代は、まさに戦国乱世で、大友氏は豊前一带を舞台に大内氏と抗争を繰り返していました。一五三二年、大内氏の軍勢が院内の香下付近にある「妙見岳城」に入ると大友義鑑(よしあき)はそこを攻撃させました。天文三年(一五三四年)には、豊後へ侵攻する大内軍を食い止めるために、吉弘



氏直・寒田親将(そうだちかまさ)を大将に命じて豊前に出兵させます。山香の大村山に本陣をおいた大友勢は、氏直や親将らが山麓の「勢場ヶ原」に陣を張る大内軍に突撃して奮戦、自ら戦死するなどの敗北を喫しましたが、援軍の到着により大内軍は撃退されました。大将の吉弘氏直は、弱冠十九才の若武者であり、いまま大村山の頂上に供養の碑が残されています。(勢場が原の戦い)。ちなみに、この年には、尾張国で織田信長が生まれています。

### 大友氏の衰退と滅亡

全盛期には、九州を併呑(へいどん)するほどの勢威を誇った大友氏でしたが、天正六年(一五七八年)に日向に出兵し、高城・耳川の戦いにおいて島津軍に敗れると、一気に凋落(ちようらく)の色彩を深めていきます。鎮信も大友軍の一翼を担って、高城の戦で戦死しました。このときに郷士の武士達も多数戦死したようで、大友・田代の持地庵には「大力兵部」という武将



の墓標が在ります。鎮信のあとには十一代統幸(むねゆき)が継ぎ、衰運の大友氏の勢力挽回に尽力しました。

※吉弘氏は、親信から統幸まで五代にわたる当主のうち四人までが戦死を遂げています。

天正十五年、豊臣秀吉の九州征伐で島津氏が降伏すると、大友宗麟の子、義統(よしむね)は豊後一国を安堵されましたが、朝鮮の役(文禄の役)において秀吉の怒りを買って取り潰しとなり、大友氏は没落しました。屋山城は、このときに廃城となります。

大友氏の改易後、吉弘統幸は豊前

### 1578年高城・耳川の戦い



1585年島津軍の豊後侵攻

の中津城主黒田如水に招かれて厚遇を受けましたが、のちに従兄弟で筑後の柳河城主立花宗茂に知行二千石を賜り、家臣に取り立てられています。

慶長五年(一六〇〇年)、関ヶ原合戦の前夜、大友家再興を企図する大友義統は石田三成方の西軍に属し、豊後の国に戻りました。統幸はかつての主君義統のところへ駆け付け、時勢を説いて東軍に与(くみ)することを進言しますが、聞き入れられず、やむなく主君に従って石垣原の合戦に参陣しました。

戦いは、大友軍の劣勢でした。統幸は得意の槍を振るって黒田軍に果敢に挑み、ついに華々

